

新刊紹介

史上の親鸞

中澤見明著

創作や宣傳の親鸞ばかりでは困つたもので、眞面目な研究の出ればならぬと思つて居る矢先に出た第一書として先づ本書を推奨する。著者中澤見明氏は伊勢の片田舎に隠れた篤學の人、十數年間専ら親鸞傳の討究に心血を注がれた一成果が本書である。本書の内容を窺ふに第一章序説、第二章聖人の俗姓に就て第三章聖人の幼時と在教時代、第四章六角夢想と吉水八室、第五章吉水門下に於ける聖人、第六章聖人越後の配流及其家族、第七章常陸稻田の幽栖時代、第八章歸洛後の聖人、第九章聖人性格及びその思想、第十章聖人の入滅、第十一章結論の十一章より成る。辻善之助博士は序を寄せていはく「予が本書に於て最も感服せるは、著者の研究態度の眞摯なるにあり。著者は身を眞宗の僧籍に列しながら、よく宗派偏執の見に囚はれず、自由に大膽にその説を發表せり、學に忠なる者に非ずば、焉ぞよくかくの如くなるを得んや」と。實にその科學的研究法に於て從來の群書を遙かに凌駕してゐることは、一度本書を繙く者の等しく見るところである。親鸞傳として本書を考察する時には叙述に精靡があつて、且つ殘された問題がなほ幾何かあるが、著者が快力を以て亂麻を斷つが如き得意の題目に關しては、何人も近づくべからざるものがある。即ち親鸞傳としては網羅し盡し

てはゐないが、深く鋭く突込んだ點に於ては類無き價值を有するものである。

先づ親鸞傳として本書が、昨年本派本願寺から發見された惠信尼の書狀を自由に利用したことは最もすぐれた點で、著者の創見は多くこれに基く。又覺如上人の御傳鈔の性質を明かに觀念したことは、著者の研究態度を根本的に決定したものと云へるであらう。即ち著者は御傳鈔を以て聖人生涯の史實を載せたものではなくして、眞宗教義を顯すものと考へ、上卷は入信の徑路を述べ、眞宗の安心を示し、下卷は信後の生活を顯し、眞宗行者の態度を教へたものとし、眞宗安心繪詞とでもいつてよからうとするのである(八二―三頁)。かくの如くして著者は御傳鈔を全く離れてはじめて聖人生涯の史實を客觀的に討究し得たのである。よつてその討究の結果、著者獨得の見解として擧ぐべきものか左に別記して見よう。

(一) 聖人の俗姓系圖を採つて、後世作者のあまを明かにした(三―四六頁)

(二) 青蓮院待遇について、歎を挟み當時の門跡は覺快法親王で、慈圓ではないことを明かにした(五四頁)。

(三) 六角夢想の告命の内容に明かにす(六四頁以下)。

(四) 聖人が一念義系に關係なきことを證明す(八一頁)。

(五) 歎異鈔の作者を疑議し、覺如上人に影響あることを述べ(九〇頁)

(六) 聖人の家庭について詳しく攻究し、その内室前後通じて人あり、子女八人以上と推定す、特に覺信尼の去就につ

いて小野宮家久我家の系圖を調査す（一〇六頁以下）。

（七）聖人が化他の方面に努力すべく決心したのは寛喜三年以後に屬することを明かにす（一四一頁）。

（八）敎行信證の完成を歸洛以後寛元五年以前としたこと、同時に元仁元年の紀年の内容を推定す（一六〇頁以下）

以上別記したところは著者一家の見の存する重要な點である。

前にも述べた如く親鸞傳としては本書に洩れた問題が少くないのであつて、聖人の交友、門侶、光明本尊、著書などについては殆んど説かれてゐないのであるが、それは別として本書を一讀して氣づいた點を一二述べるならば、信行兩座については明義進文集の記事が参照してはしかつた、なほ信不退の座に列した聖覺、信空は光明本尊と深い關係を有することを注意したい。次に關東に於ける門弟の集會所は下野の高田であつたと思ふさいはれてゐるが（一六〇頁）、果して高田一處であつたであらうか。各地散在の小敎團で夫々集會する道場を有し、著者の推斷されるが如く統一的の機關を有したのではなかつたか。次に尊號眞像銘文の説明の中に（一七三頁）、「自像に銘文を書て同時にその銘の註釋を記入した」といはれてゐるが、自像とは限らぬのであつて、標題の眞像は三國の先徳にも互つて居る。こゝでも光明本尊に關聯するを一言でも述べてほしかつた。

なほ附録として史學雜誌に發表された「聖徳太子の三經疏等に見えたる思想及影響」が載せられて居る。その中で藥獵については誤解があるやうである。藥獵のことは飯田武郷の日本

書紀通釋等を参照するならば一目瞭然たるものであるが、これは遺憾ながら遊獵に代へるこはいへぬもので、端午の日に鹿茸を狩る夏獵のことである。評者はかつて短歌雜誌潮音の第四卷第五號に「藥獵」と題する一文を載せて辯じたことがある。

（橋川）（菊判布裝、價二、二〇、京都文獻書院發行）

日蓮より觀たる親鸞 清水梁山著

本書はもと「淨土眞宗論」と題して明治三十七年に出版されたものを、再び「日蓮より觀たる親鸞」と改題して世に出したものである。

著者の本書起稿の動機は、日蓮敎徒をして親鸞を知らしめ、親鸞敎徒をして日蓮を知らしめ、日本の一大宗敎が從來上、全く衝突の事實を以て始終せるものをして、統一の歸趣を明にせんとするにある。

今その内容を見るに、第一編緒論に於て、第一章に宗名を明し、第二章に相承を明し、龍樹以下源空にいたるまでの念佛の次第を示してある。第二編本論に於て第一章に親鸞の念佛を明し、第二章に於て敎行信證について、敎、行、信、證、身、佛土と項を分ちて解説し評論をなす。第三編結論に於て、第一章には二大宗派過去の衝突の事實をのべ、まづ日蓮親鸞の史的關係を見日蓮の念佛無間論に及びて是に對する後人の誤解を解く。第二章に於て二大宗派の未來の統一を希望が示されてある。

而も著者の立場は、立論の基礎を専ら日蓮の敎旨に置き、以て親鸞の敎義を批判したものである。日蓮宗徒としての著者

しては又止むを得ない事であらうが、果して斯如き方法に於て著者の意志する宗派の統一と云ふものが可能であらふか。茲に方法的省察がなされねばならぬと思ふ。或ひは又企圖目的に對する省察が爲されねばならぬと思ふ。

發行所 東京市小石川區原町六番地 丙午出版社 定價三圓

阿毘達磨論の研究

木村泰賢著

先に『原始佛教思想論』を出して間もなき事ながら、今又『阿毘達磨論の研究』といふ書を出した、誠に木村博士の精力絶倫には驚かざるを得ない。本書は五編に分たれて、第一は序論、第二は舍利弗阿毘曇論、第三は施設足論、第四は大毘婆沙論、第五は俱舍論に就いて、其詳細なる研究を發表されたものであるから、阿毘達磨論の研究として完全したものでない事は博士も自ら其序文に記して居らるゝが、しかし折角の事であるから今少しく纏めて發表して下さつたらばと思はるゝ、點がないでもない。單に四個の論文を集めて、其に序分を附加した様に思はるゝから幾分見劣りせらるゝ様でもあるが、しかし其一一の論文は誠に有益であつて、永く學界を益する事と思はれる。纏つたものとして考へる時は品類足論が、又は發智論を主題とせねばならぬ筈であるけれども、論文を集めたさいふ點から見ればさういふ事は寧ろ問はぬ方がよからう。

一、舍利弗阿毘曇論 かういふ書はあまり人の讀まぬ煩瑣此上もないものであるが、其を忠實に南方論部と比較して發表された事は誠に敬服に價する。可なり長いと思ふから頁數を調べて

見れば百に近い程ある。之を讀むのに大分に困つた讀者もあつた様だが、しかし其れ丈忠實に詳細に之を研究された事を多謝する。又かういふものを印刷した丙午出版社の奮發にも感謝せざるを得ない。

百五十五頁已下に分別論者に就いて論じて居らるゝが、元來分別論者の名は宗輪論には出て居ない。二十部のどれに屬するかといふ事を論するよりも、寧ろ別部として之を取り扱つては如何、西敎傳説は之を一部として記して居る。しかし分別論者が説一切有部の一派かどうかといふ事には尙研究の餘地があらう。婆沙論から見ると應理論者に對する分別論者であつて其が有部の一派と見られぬ事もない私は現今の處では先づさういふ様に思つて居る。

二、大毘婆沙論 此下は主に結集の因縁に就いて論じて居らるゝが、其中で法救、妙音、世友覺天の四大論師等を婆沙は前の人としたのが氏の努力であるらしい。けれどもさういふ議論は小野玄妙君が佛教年代考で既に論じた事であつて、別に珍らしいといふ程でもないが、しかし博士の研究は徑路明瞭で、研究が其で完成せられた様に思はるゝ、丈、仲々其が上手に書かれてあるのには敬服せざるを得ない。初に婆沙と迦膩色迦王との關係を論じて、王は婆沙の編纂には關係はないと結論し、次に脇尊者及び大論師も婆沙以前の人であつて、此人々も婆沙に關係はないと結論してある處などは、博士得意の議論であつて大に傾聴すべき價值がある様だが、しかし私は少し研究して見たと思ふ。

三、俱舍論 俱舍論製作の參考書が法勝論だといふ事を極力述べたのが此章の大體である。私も前からさう思うて居る一人であるから、其は確に間違ひない議論として賛意を表すが、しかし法勝論と婆沙論とごちらに重きを置くか、私は寧ろ婆沙論に重きを置きたいと思ふ。法勝論は其參考書であつて形式の上からは餘程法勝論に近い様であるが、内容の上からいへば法勝論を改作するといふよりも、寧ろ婆沙の批評的綱要書と見るのが穩當であらう。迦濕彌羅國の毘婆沙佛、阿毘達磨を講する理善く成立す。我れ多く彼に依て對法宗を釋すといふ文から見ても、婆沙の批評的述磨的講義と見るのが適當であると思ふ。博士の意も或はさうかも知れぬが、法勝論を極力主張したのでさうでない様にも見られる。何にしても阿毘達磨論に對する新研究の種々が公にされた事は學界の慶事であるから、此種研究者の爲に私は謹んで此書の閲讀を推奨しておく。菊版三三〇頁、價三圓五十錢 發行所東京丙午出版社（舟橋生）

日本民族思想の研究

津田 敬武 著

本書は著者が序にも、述べて居られる通り、今日の時勢を慨し、我が國の將來を憂ふるのあまり、日本の民族思想の内容を研究し、それに批判を加へたもので、第一章神道祭祀の根本觀念より、我が國體と改造問題に至るまで前後通じて十八章よりなり、更にその敘述を助けるために四十六個の挿圖をなし懇切な極めたものである。

先づ著者の考へられるところによれば、「吾々日本人は、其の

腦裏から祖先に對する觀念を取り去つては、何事にも安堵して従事することが出来ない。即ち日本人の全歴史を通じて、一貫して流れて居るものは祖先崇拜で佛敎はそれに大なる力添へをなし、精神的物質的兩面に互つて豊富なる内容を與へたものを見るべきである」（一九七頁）と。思ふに本書を一貫せる著者の根本思想は、この外には出でざるが如く、祖先崇拜の思想が國民生活の展開と共に如何に變遷して來たかといふ點を特に注意して觀察描寫したものとといふことが出来る。その間、豊富なる史料を驅使して、自由に論旨を徹底せしめ殊に現代の時事問題との關聯を密接にして空疎なる歴史研究に終らざらしめれば、著者の識見の甚だ高くして深きを知らしめるといつてよい。

然しながら章相互の間の連絡について見るに多少、興味中心にテーマを選んだ形跡がないではない。記請文に現はれたる罪惡觀と神佛の崇拜、神社佛閣に掲げられたる繪馬と滅罪生善の思想の如き、前後の連絡を些か失つた感がある。いはば本書を一貫するシステムがより鮮かに印象せしめられたのである。

今こゝに本書全篇に互る批評は差控へ、本書中佛敎に關する諸章を稍詳しく紹介批評することとしよう。一四一頁に難波四天王寺の記事があるが、その中に「さて四天王は佛土の四方を守護する神」と説かれて居るけれども、勿論佛土は誤りで四王天は須彌山の中腹にあつて欲界に屬することは、いふ迄もない。一五九頁に「深遠なる教理を偶する天台、眞言兩宗の如きも、其の最も淺近なる事相即ち祈禱供養の形式のみが盛んななり」云々があるが、説明が簡略すぎるので誤解を招く虞ればな

いであらうか。天台といふよりは台密でもあるのが然るべく又事相が直ちに淺近さといふことは出来まい。而して又事相が即ち祈禱供養の形式さば限らぬから、も少し言葉を補ふべきではなからうか。無論著者の眞意は兩むことは出来るが。

一六二頁に藤原道長が吉野金峯に埋めた繩筒の銘文が引かれて居るが、その中で「神力圓滿」といふ語に圈點が附けてあつて、著者はこの語を神祇の力神明の力と解するつもりらしいが神力なる語は佛經に屢々見えるところで必ずしも神の力の意味ではない。不測の力、不思議の力と見るのが穩健な解釋である神力を神の力とするのは、多少附會の嫌ひがないではなからうか。

一八三頁に盆踊のことが、見えるが上村觀光氏の禪林文藝史譯に収められてゐるやうな室町時代の盆踊についても述べてほしく思ふ。

一九六頁に於て本地垂迹説に言及する所があるが、本書の性質として神佛習合の沿革を特に詳しく述べてほしく思ふ。神宮寺の起源などについても、日本固有の思想信仰と佛教とが如何に結びついたかを討究せられるべきと考へる。これらについては一章を立てる必要が十分にあるであらう。起請文や繪馬等よりも以上に重要な問題と思はれるにも拘らず、甚だ簡單な叙述にしか接しないのは遺憾である。

以上舉げた所は訂正を望むもの、若しくは増補を希ふ一二の點に過ぎないのであつて、これによつて決して本書の價値を定めやうとするものではない。殊に奈良朝寫經顯文年表(一五一頁)等は、尊い研究の結晶であつて、後學を裨益するところ甚

だ大であるといはねばならぬ。本書を通貫する著書の識見と理想とは等しく現代日本國民の憧憬に一道の光明と信念とを賦與せずには措かないもののあることは多言を要しないから、ひろく江湖の心讀を從ほしたいのである(橋川)。(四六判布裝 價三、二〇、東京大鏡閣發行)

最近雜誌佛教研究論文一覽

(十月—二月)

(A) 典籍研究

達磨と楞伽經

鈴木 大拙 佛教研究三ノ四

教行證文類完成年代考

鷺尾 教導 同

喜田博士の教行信證に對する疑義を讀みて

廣瀬 南雄 同

教行信證の疑問に就て

辻 善之助 史學雜誌二

什譯法華提婆品に就て

松本文三郎 哲學研究二

佛說阿彌陀經要解釋述

慈 等 叡山宗教二

佛典批判の進化

大野 法道 無礙光一・二

二十唯識論の藏漢兩譯について

明石 慧達 龍大論叢二五

阿含經論

山田 契誠 同

親鸞上人の寫語法

吉澤 義則 同

理源大師の尊勝陀羅尼

宮田 蘭堂 阿波名勝